

共五本

卷五

洋学文庫  
文庫 8  
C 176  
5



萬國新話卷之四 亞細亞海峽之部

東都 森寫中良 編輯



○象人語を解と 錫蘭

錫蘭セイロンハ象多ク。他の象と異リ。能人の海峽解土人物をいそ負志あり。某地小至是と命じれば。かたじけなく爽とがへて。ては所よ送るゝも人。他玉の象は。遇ハバ。もか。つ。地。小。蹲かぐまを伏ふたり。

萬國新話 卷之四

○桂枝 同上

此崑の山林。おろく肉桂、紙産也。土人刀紙  
 以て樹小畫を入外皮を剥去。第二  
 皮をぬいて日小晒を。其生る所の外、黄白色  
 あり。乾くよ塩ひく両端を内よ巻端  
 せの色変して黄褐色をぬく。是葉用  
 の桂枝なり。其樹三年紙歴る皮紙生  
 るるなり。紙の如し。

○涅槃ねはん 同上

明史外夷傳小云。錫蘭國の海邊に山上小石

あり。石上よ一の足跡あり。長三尺をり。

是紅毛雜話中灵鷲山の條、志せる佛足石此よりなり。 佛翠藍びいらん 嶼い

同書中小瓜哇東南海中三四の山あり。總名紙翠藍嶼といふなり。中良業、錫蘭翠藍華音同。

此紙踐ふみからがゆ多し。尚存たもたるも、中

浅水ありて。四時とも小乾くも。人皆目を拭ひ

面を洗ひ。紙も清浄といふ。山下小僧寺

あり。釋迦如来此真身まことみ牀上まどに側卧わがす。か

く、小仏牙おぼとせ。おび舍利有。お佛ぶつ涅槃ねはん槃ばん

の處なり。其寢座ねざに沉香せんこうを是を依り

諸此寶石紙しやく以てサ壯嚴さうげんと記せり。中良業、又竹枝河

の注は永樂中鄭和とて其の事なりて  
金銀宝帳を布施なりて其の事なり

○人の血を浴を 蘇門答刺

寫夷志曰蘇門答刺の酋長毎年十餘人の人弑殺し其血をみそみれを浴を別四時疾疹をせせりとなす。  
中良事小古城王の人  
膽酒小似しるものなり

○犀象と戦ふ

「ヨハンブラア」が萬國畧説小曰此玉此象さくめり大ゆりく能人より別戰國ハ殊り象は用由又犀象を性くみり象を悟む小たすそのと雖も能象と闘ふ

夷小矢りんるも黙止かきり水其修小地を與ふ伊西把尼亞やぐて其地小城城築き室城宮み銃を列ね刀首を置く要害を堅固小を其後遂小呂宋を圍て玉弑殺し。此玉を盡く伊西把尼亞此有とてたし小りり今をるは伊西把尼亞の呂宋を。曾呂利が大岡秀吉小紙袋一盃米弑殺しりんと乞うると同日の淡なり。

○男色弑禁む 同上

東西洋考小曰呂宋國校童此禁を嚴む

此北より来る華人犯し其のありては天小  
送ふ罪人なり。として新瓜積て焚殺

中良案より小男を禁じしもの法紅毛とお似  
たり是月一歐羅巴中北伊西把尼亞より  
酋長を殺す西洋の  
法派用たりなり

○丁子 美沙谷采 馬路古

家兄の譯説小曰馬路古の諸島ハ赤道の  
下小あり。其北より小島より多く丁子  
瓜産す「テルナテ」「チドヒ」「モチル」「マ  
シア」に「バシア」の五島殊小多しとなす。  
其樹月桂チカウソクに似く。葉やうきく細く柳の

葉の似し。花も一先ハ白く。後縁小紅く

萎く墮れ。色赤く堅まり遂小変し

実ともなり。其形状釘のやし。故小名て丁子

紅毛より「ナゲル」といふ「ナゲル」ハ釘の  
変名なり。丁子ハ漢人の譯なり。花此縁

色なる也。其花の及小所小あり。其

實ハ枝の隙に攢簇す。此地法もふびり

畜獸あり。只所羊と鶴とのあり。都小

給糧は小乏く。土人樹皮紙磨て粉

をとり。餅を造りて食とす。其樹を「サア

ゴウボー」トといふ。彼餅小製し

所謂沙谷米なり。

○食火鷄 番達

番達ハムネハ小鳥なり。此鳥小異鳥紙  
産を其名をト「エメウ」といふ。大さ鳩の如  
く。舌なく翼ふ。羽毛黒く羽根上小  
冠あり。其質鼈殼の如し。爪ハ甚るるごと  
物小觸れむ後さ小跳り。馬の跳り  
似たり。熾炭磁器此缺とすども。扱ある  
由是ぞ則今言ふ。是「エメウ」なるものなり。  
いし中食火鷄なり俗人やこれれを食火鷄と  
馳鳥とすうちて是をさるものあり 此鳥

安永年間紅毛人

加比丹ハコチニロニル  
の内とそえぬ志まこり

携へ来々 公へ進献志り。紙。後置ふて

飼せらけり。が。幾移もなく死し。り。と

なり。客歳跡壽館めく。茶品會の外。

医官田村氏。此鳥死し。り。紙。公を

送り。り。り。り。其。席へゆされぬ。

○唐泊浦孫七勅泥へ漂着の話

筑前比國志摩郡唐泊浦の伊勢丸といふ  
船。水主船頭ともふ二十人。宝曆十二年十月。  
奥州常杓の堺なる。塩屋比岬の海上にて

龍風よあり。天竺北属嶋。渤泥一漂流し。同國中。カラガニソウロク文郎馬神などいへる地を遍歴する内。同船の者ハ残らざり死に。只一人活のむり。天明七年六月十六日。渤泥北近玉。爪哇國の都城。同夕七也より。発船せし紅毛船あり。日本へ送られ。孫七たるとの。渤泥小島に。間此物語を審小茅紀し。七天竺活と標記せし書。一卷あり。之を書中より。抜萃せり奇談。

孫七より。渤泥へ漂着せし時。陸より。山林に之れを。栗の如き菓枝も撿ふ。生りりを。何れも飢餓此あり。手々を。食する。其味。甘酸。志。頻り。肚脹胃完痛あり。酒も。酔。死。良久志。

○異菓 渤泥

孫七より。渤泥へ漂着せし時。陸より。山林に之れを。栗の如き菓枝も撿ふ。生りりを。何れも飢餓此あり。手々を。食する。其味。甘酸。志。頻り。肚脹胃完痛あり。酒も。酔。死。良久志。

てえよ復しり水に。少しハ後小  
精も俯。蜂後船をも助け。後日  
土人よ好まむ。此実誠指碑く大河の  
淵へ沉死。水底此魚とくを喰啜。浮ふ  
時。網を入く是誠死。大よ毒ある草芥  
アと語くしとなん。

○日本人を見世ぬあは 同上

渤泥國中「カラガ」にといつる城下。吟ひ  
居く肉。其の漬ぬ船に去つし。漂人  
小乗船とへといつ。皆くおまも也送

甲冑をもと。公姫しく。紫移まき。船よハ三  
の帆を引揚。同玉中「ソウロク」の城下  
着岸し。同公の者城引分て。所  
へ賣渡し。幸五郎といつる。水主と孫七  
をバ。「ソウロク」の地へ賣渡しぬ。二人ハ  
うある。其目やえると。い。鬱悒る。居  
つる。夷ども来りて。延る。月代と判せ。  
日本風小髪。狐結せ。羅比。弁奪紙着せ。  
戲。其を接く。所。帯。行ぬ。二人ハ。一。合  
合。点。行。ぬ。ど。夷。ども。の。さ。ら。ま。る。也。不。ぬ。て



居る。ハ。蛇く。少れ。太鼓を拵也。銅鑼太鼓  
 噴内を拵る。鳥鬼ども。後小列た。松  
 子可笑く。之。一。立る。仲。い。う。さ。自。我。く。成  
 又。セ。物。小。さ。る。事。と。今。得。る。こ。う。ら。見  
 物の男女山。の。如。く。集。あ。ひ。疾。く。ど。め。し。と  
 り。ふ。り。み。や。口。く。よ。喊。起。り。る。そ。の。所。は。深  
 の。夷。何。た。り。と。も。日。本。が。成。唱。ひ。て。踊。進  
 と。い。ふ。否。と。い。ふ。余。成。や。失。つ。れ。ん。ど。ら  
 ん。と。口。情。あ。げ。る。為。成。た。く。池。の。泥。亀  
 子。不。ん。を。へ。五。路。あ。げ。前。泥。亀。の。子。と。  
是。ハ。西。國。の  
 小。鳥。也。

取次拍子不躑躅。了。進。ハ。今。昔。で。の。看。人。と。新  
 入。此。看。流。人。と。入。留。り。さ。る。何。れ。も。か。り。ぬ  
 形。勢。あ。り。支。と。り。此。友。人。成。駕。成。小。乗。也。  
 所。々。方。々。紙。見。世。と。の。小。連。与。り。ぬ。そ。の。る。ハ  
 食物。よ。紅。を。附。火。酒。成。飲。セ。ら。し。て。廉  
 畧。母。ハ。セ。と。り。け。り。

○火酒 同上

此地の火酒ハ。飯を炊き。瓶小入。紫糖。此。水  
 小。浸。し。ぬ。む。泡。立。て。涌。上。り。た。り。支。と。り  
 泡。消。之。後。釜。小。入。甑。を。と。り。支。と。り。を。門。と

たり

○イリンカワトの人物 同上

男子ハ身の長六尺五寸。耳もく、齒耳  
 乃ホ、真鍮の環を入り。髪ハ赤く結れ  
 眼の毛淡白。皆丸裸して禪衣上り  
 いさう物衣纏へり。女ハ耳環をつなきて  
 瑤珞の如くトケ。牙ハ羅衣を穿て臂  
 より先と袖と衣露り。螺髪を堆  
 髪あり。生花を、なまき并とらるるを

渤泥國の人ハ何方も大抵  
 同ト風俗のちも似たなり

取次拍子不躑躅。王了生バ。今までの者人と新  
 入此看荒人ト入習らる。何事もかりぬ  
 形勢あり。丈夫り。此友人或駕船不乗セ。  
 所々方々紙見世その小連片りぬ。そるハ  
 食物よ紅を附。火酒孤飲セらる。て。庶  
 畧めハセざりけり。

○火酒 同上

此地の火酒ハ。飯を炊き、瓶小入紫糖此水  
 小浸し、蒸む。泡立て涌上りたり。丈夫  
 泡消之後。釜小入甌をこして。皮を門と

たけり

○イリンカワトの人物 同上

男子ハ身の長六尺ぐらゐ。耳もく、鬚耳まみ乃ホ、真真ま飾しの環わを入いり。髪かみハ赤あかく結むすれ。眼まなこの毛け淡あは白しろト。皆みな丸まる裸はだかト。禪ぜん此こゝ上うへもいさゝ物もの紙し纏まとへ。女にハ耳みみ環わをつつたをまぎて。瑤ぎやう璐ろの如ごとく下くだケ。牙かみハ、羅ら比ひ衣いを穿きて臂うでより先まへと袖そでと代あり。螺ら髪かみを堆たい髪かみをかみ。生なま花はなをかみ。并なととらるらととなり。  
渤海國の人ハ何れも大抵  
同ト風俗のちもむたなり

○死人の首くちか積た 同上

「イリンカワトの地ちみそハ。親おや死しされば首くちかを切きく残のこし。並な外ほか人ひと此こゝ首くちかを切きて死し骸がは小こ接つ厚あつく是こゝ紙し葬まうりたり。去いらるられば大おほく崇たかまをたかまあり。男おとこ女むすめの首くちか。女むすめハ男おとこの首くちか接つとたし。家いへ有あ者ものハ急いそぐ賣う人ひとを買かひ急いそぐ。接つ首くちかは備たもとたり。貧ひん困くわんよりして去い人ひと紙し買か事こと能あたらるら者ものハ死し衆しゆの科か人ひとを乞こふとく。首くちかを接つ。又またハ他ほか此こゝ地ちへ出でて推おし埋めし。其その首くちか紙し買かりて葬まうれ小

供<sub>り</sub>ら<sub>る</sub>と<sub>り</sub>て<sub>り</sub>。

○文郎馬神の風土同上

文郎馬神ハ渤海泥國中此都會なる南系福州山東山西の華人倍地一々舖を穿く。亦他ハ何れも尾蓋あり。市街狐板あり。張リ。往來の人土狐踏を華紅垂拍輻湊く。甚繁昌此地なり。孫七八は町内の綵帛舖へ金銭三十文あり買は此金銭一文を銀十錢同小幣と云ふ。銅殺紅毛の金銀銭以通用するのト男とわく。名を日本と呼れける。主人

ハ華人あり名狐タイコン友と云。妻をハキトト云ふ。伴當手代も華人なり。ト男ハ烏鬼下女も崑崙奴の娘なり。上下二十人餘のくらと云。互以て此豪家を定。主人夫婦老母とも結搦人あり。亦内の元志女を云行義つと云。男女序次同ト云して食セ也。飯ハ下男ヲ焚セ下飯下女ヲ調理セしむ。此玉都て暖氣ありて。隆慶五六月此氣候の如くあり。四時とも小草木此花咲満く絶るるなり。冬と夏衣ありて凌

うたなうり。さうかろう小蚤蚊多し。是と  
あく銭とたう。常よ蚊帳紙たうとあま。

○言語 同上

文郎馬神少く。是ハ何ぞといふも紙コレ  
サニヤア」ぞうさうらかうするといふ事を  
「テウサニヤア」といふ。教ハ「シヤトウ」  
「チカ」  
「アコハ」<sup>之。四の垂語</sup>「ト」<sup>五</sup>「ア」<sup>六</sup>「ト」<sup>七</sup>「ヤ  
ワトウ」<sup>七</sup>「ハロウ」又「ダラ」<sup>八</sup>「サニヤア」<sup>九</sup>「サニ  
ラ」<sup>九</sup>「サ」<sup>十</sup>「ポ」<sup>十</sup>本書ハ此外の語紙記さず。

○商人 同上

街路を行ふ坊賣。声紙まう喊るのう。  
阿刺吉賣ハ噴呐と吹化員郎ハ彫紙摺り賣  
油郎ハ鐸を振。醬油賣也。賣肉翁ハ小太鼓紙  
あ。何れも擔夫小肩し。あう賣あまう

○婚娶 同上

孫七ウ主人の才カレ官小作伐もろ人有  
く。結親とのひ。良月紙揀て嫁れあま  
中良素ふけ帰ハ此地小住居ち華人の娘あま。お玉の人ハ玉の  
女しをさう。あま男の髪紙剃去。嫁をけく妻合をい。あま紙  
は。新郎の方より新婦の方へ聘礼の品

と送る。其物件ハ。衣服三袋〇何れも子物か子持物。金少く造りし小いらしき事ハハハ送る戒指六ツ。手腕二ツ。金比環ニツ。金算十三奉。紅毛金銭百二十文。履二足。襪二足。火酒一斗八二瓶。蜜蝋五十斤掛の大蠟燭二挺。猪一疋。家鴨一番。右の東西ちかぐ或ハ箱小入又ハ。臺又裁く下人教多小持也。媒人かき嬌客をし。め附添の人く。都て十八人新婚の。家へ行く後。酒調酒牌。家不瑞生。巴昂刻。新人の方より送る物あり。衣裳一着。中着一ツ。赤き毛紙何れも。豆一ツ〇中良業ハ。是是。華人の豆豆。

物有り。枕六〇長壹尺五寸ありものニハ。是ハ八尺の枕あり長二尺ありものニ。是ハ手此枕あり長三尺あり物ニ。又ハ足の枕あり。新郎の方より送る物。猪。家鴨。鶏。づま七。雄氏。とめく。雌を返。此三種ハ。かの。やり。ては。各々。酒に。金錢ハ。二箇多。大蠟炬も。一挺焼。一挺ハ。度一。ぬ。算の。家ハ。火紙。照一。半切桶ハ。米紙盛。上ハ。其中。一押立。門首。小出一。さく。めき。後り。く。侍間。もな。く。波聘。礼小。文一。大蠟炬に。挑焼。二張押。双べ。く。先を。照さ。新人。と同。し。年齡。の婦。人二。人ま。ぶく。衣紙。被き。左右。よま。るべ。

新婦ハ却テ新を家一。首飾ハ金の元結。浪  
 の櫛。十二本の釵をさし。耳朶ニ瑤路をさけ。  
 手足小金比環。衣入。衣服ハいりも齊整。お扮  
 天蓋のぬき物をさるるを。前後のさるる十二人。  
 悉く未だ蠟燭。彼半切一。而小立。や華燭  
 の席へ通れ。氏族家族をさるる。町中の若者  
 まで。毎手赤紙蠟燭を燈し。肩を挨し。足代  
 並々入集ひ。新人不對して千歡万喜を演  
 るなり。是一來よ。媳の容白をさるる。おあり。  
 其燈し。至蠟炬のち。小席小燈。豊堂まで

小あけける男子を出。自今以後。妻のねる。指  
 さし。もく。まはじし。海と山。小松を立らるる。  
 兄弟今ハ。せ子ラレをさるし。人質を門立て  
 系取し。千里の波路を一走。小。中へ帰帆し  
 く。末次氏へ面謁し。人質の子。返し。其年  
 の内大寛の。せ子ラレ。彼海城。せん。し。一。取の  
 重人ども。致。重く刑。子。行ひ。末次氏。す。深く  
 花を謝し。ら。お。り。と。り。せ子ラレ。小。送。娘  
 も。さ。さ。る。る。お。む。む。さ。白。で。め。ハ。連。翌。年。人。質。を  
 返し。らる。彼。濱。田。が。智。勇。の。程。始。皇。を。刺。損

たへる荆軻ぶぐハ日をおかしくあて海を  
 うぐむ。亦多岐ハ世成早く。茅新苑ハ肥の  
 みちの後の玉。何系屋の店とたりるるあん  
 此箇ハハレコテイに小裁するを北山氏の摸写  
 くらたり。文字成回ぶるもる異國の果ヲぞ  
 と。畫小写し。筆小記し。く。茶。紙のこも。淡田  
 兄才ハ。かへもくも。日。本。魂。の。ま。え。乃。天。元。元。地。也。  
 徹りつる者あり。

渡交能蒸て白く搗切丸く餅もあつ。又  
 押平免て角小切も有たり。白餅ハ白糖の多。馬  
 餅ハ黒糖此水あて渡るあり。年始客の性ま  
 くらぐ。日。本。小。か。そ。ぐ。ぶ。り。し。な。ん。三。月。に。節。供  
 ハ。さ。や。ら。る。り。ふ。し。又。月。の。節。白。ハ。糯。米。紙。あ。り。浸  
 一。毎。の。蒸。子。包。み。砂。糖。水。少。く。あ。げ。る。も。あ  
 り。又。蒸。も。有。り。也。七。月。の。盂。蘭。盆。會。也。日。本  
 小。珍。り。ぐ。り。越。な。り。又。不。畏。也。

○燕窩 同上

此地の山洞川小流する石窟の内に「カバヤ」と



いよりの窟あり。鳥ハ燕つばき也似す。其窟そ色  
かく。ちりくくと思以母の所ところあり。  
中良業は是窟富なり。紅毛語は「ホーゲル子スチ止」といふ食料  
を味ひ美あり。がらあり。其窟をいふのなり。

紅毛人入銀して一介以銀八十日小買りて  
方かた炬たきを焼やして岩窟いそや入いりて  
五獲ごくわくとあり。蕃主ばんしゆより制禁ありて糧りやうよる  
をちりす。然りふ或年。孫七が主人の隣となりに  
悪坊あくぼう来りて。件の窟を私賣ひそかする。悪あく巡  
防人せうじん来りて是こゝに之処あり。彼者かを捕とらへ  
てま炭すす志しくし治ち候こう也。危あや角かくと孫まごトとりれど。

不給道ふきんどう水みづかかつま形かたち勢いきほなりけまま。是こゝまで  
ととひひ切きややてて吏しのし帯おびセセ一い紐ひもをを抜ぬえ。二人ふたりが  
肚はら穴あな突つ通と一いっ。白しろ刃やいばをを捨すてて逃に出でせば。二人ふたりのの吏しハ  
你おれ手てをを負おかかぎぎ。一いっ二に町まちがが往むかハハ追おををししがが息いき喘あて  
倒たふ伏ふぬ。此こゝ事ことおおひひくく中なかはは殺ころすすのの役やく人ひと已おが  
物ものをを提ひ起おくく。分ぶん路ろとと追おををれれ。山やまをを以もて  
とと逃に登のぼりしがが。葛くわ蔓まん小こ足あしままととひひてて。逃に延のびびととや  
ととひひけん。大木おほきのの梢すさへへ下くだららののがが。隠かくれれをを存ぞんずずととを。  
役人やくじんどもども。目めよりより見み隠かく鳥とり銃じゆうのの銃じゆう口くち以もてて探たねねへへ  
出でせればば。たたままりりもも敢あてて遙とほれれ谷や底ぞこへへおおちちりり

これ海邊人の者ハ赤松トシて引返シ。  
 帶傷人を足れば早息ハ後よけり。扱谷  
 赤松これより馬場ハ又つる系後を赤聖  
 ころすぞとてりりれば辛き奈紙助り。二三日  
 の後谷傳ひよ忍ひか。何玉ともなく逃躰  
 走りりしとせ。

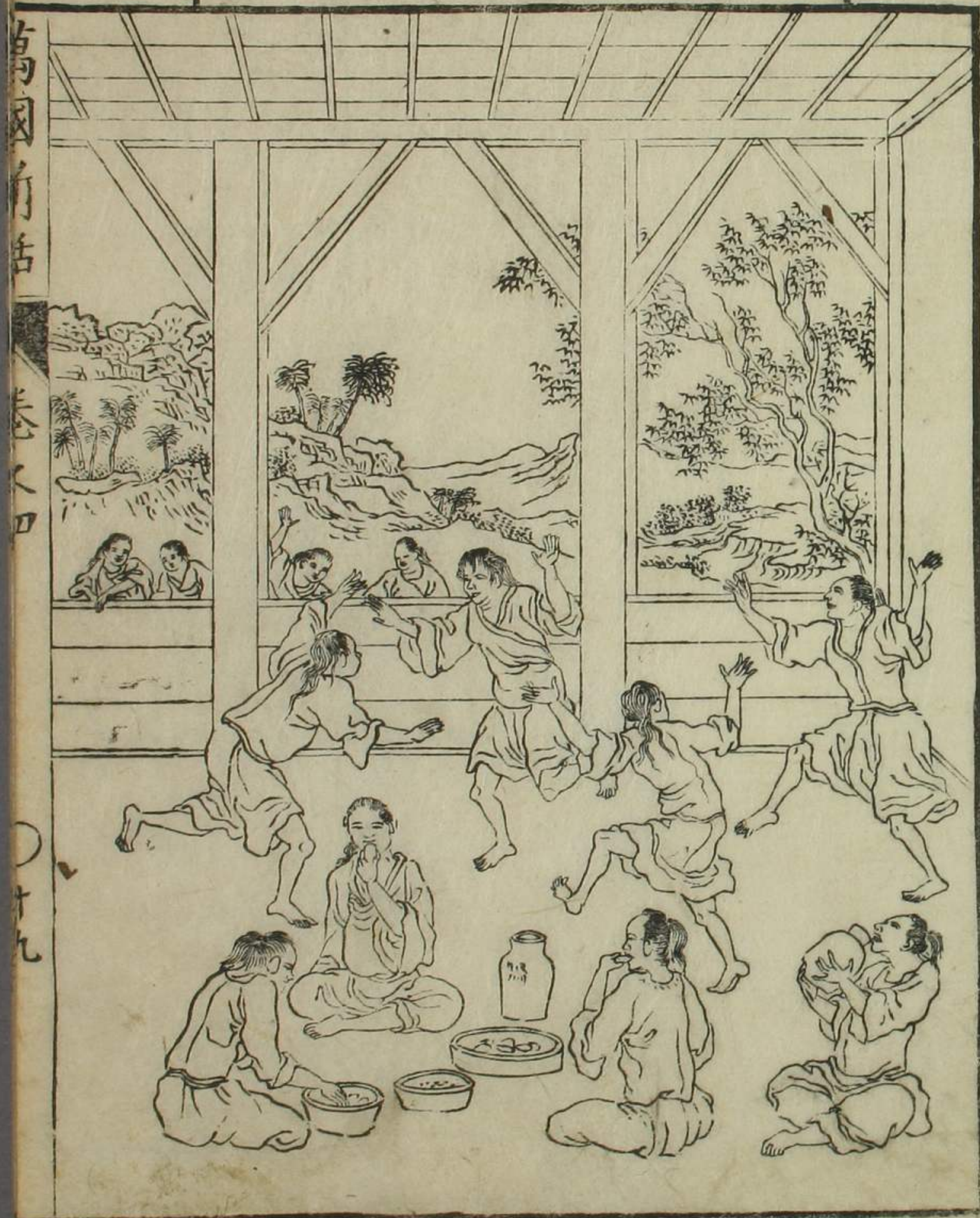
○喪居者歌集也

臺灣

往昔臺灣は主もたれ紅毛ありしを。何の  
 事也。紅毛人東南の諸國へ船をせんに便  
 地ありぬ。押取志く城郭以接へ。此の

「ホルモ一廿」と稱しり。然る小寛文年間。國  
 姓爺厦門より此島へ押渡り。紅毛人を追  
 て。おのまが居城とせし。地名をも東寧と改  
 り。あほり人の知所あり。人物風土ハ紅毛  
 雜話中。海路乃紀の條不記し。これハ  
 きぬ。此地より人死すれば裸體にして床の  
 上より其傍に火を焚て焼く。乾く其  
 臭穢鼻に搏く。振ぐしとて。喪不居。喪  
 どもハ。死屍を燻くする。酒以喫し。肉を食  
 ひ。昼夜誦用ぐとあり。此苗ハハレニテイ不

居喪者歌之圖



萬國新誌

卷之四

十九

大寬人殮之圖



萬國新誌

卷之四

十九

同

裁くは氏。山氏の模写せりたり。岡ふり子。國性爺が子。鄭錦舎。寫の主たる叶。奥妙中村。志称和の郡。太那志保とくく。地の廻紅。大寛一漂流せし。を寛文十三年八月。日かへ送り帰し。つらきあり。そその節紅至。吳明あり。若の上書。家兄岡野氏より。好く珍花見。漂民の款状。および上書の文ハ。海外異國小裁り。

○濱田兄弟智勇の結

濱田兄弟が。大寛の酋長を窘し。事ハ西川氏

既小記し。事れと。珍畜をける。因ふ。其荒原紙

説。寛永年中。淡陽の郡官。末次平花なる人。熊

帝亞の地方。回易の舟。出洋せし。其る運船を

日本より異國へ出し。高船とて。九艘あり。其時。末次氏二艘。舟が氏

一被荒木。一被糸屋。一被泉州。堺より。伊達屋。一被京都。一被角倉。君

一被伏見。一被あり。寛永十二年。外國。海傳止せし。れぬ。大寛所。策の畫

船。洋中。少く。嘲弄の。あり。貨物を。手。え。せん。と。する

小。子。人。ども。恨。憤。る。と。い。つ。ども。彼。ハ。大。船。あ。く。ま。つ。つ

と。火。盞。兵。盞。を。行。へ。り。け。方。ハ。時。交。易。の。舟。を。り

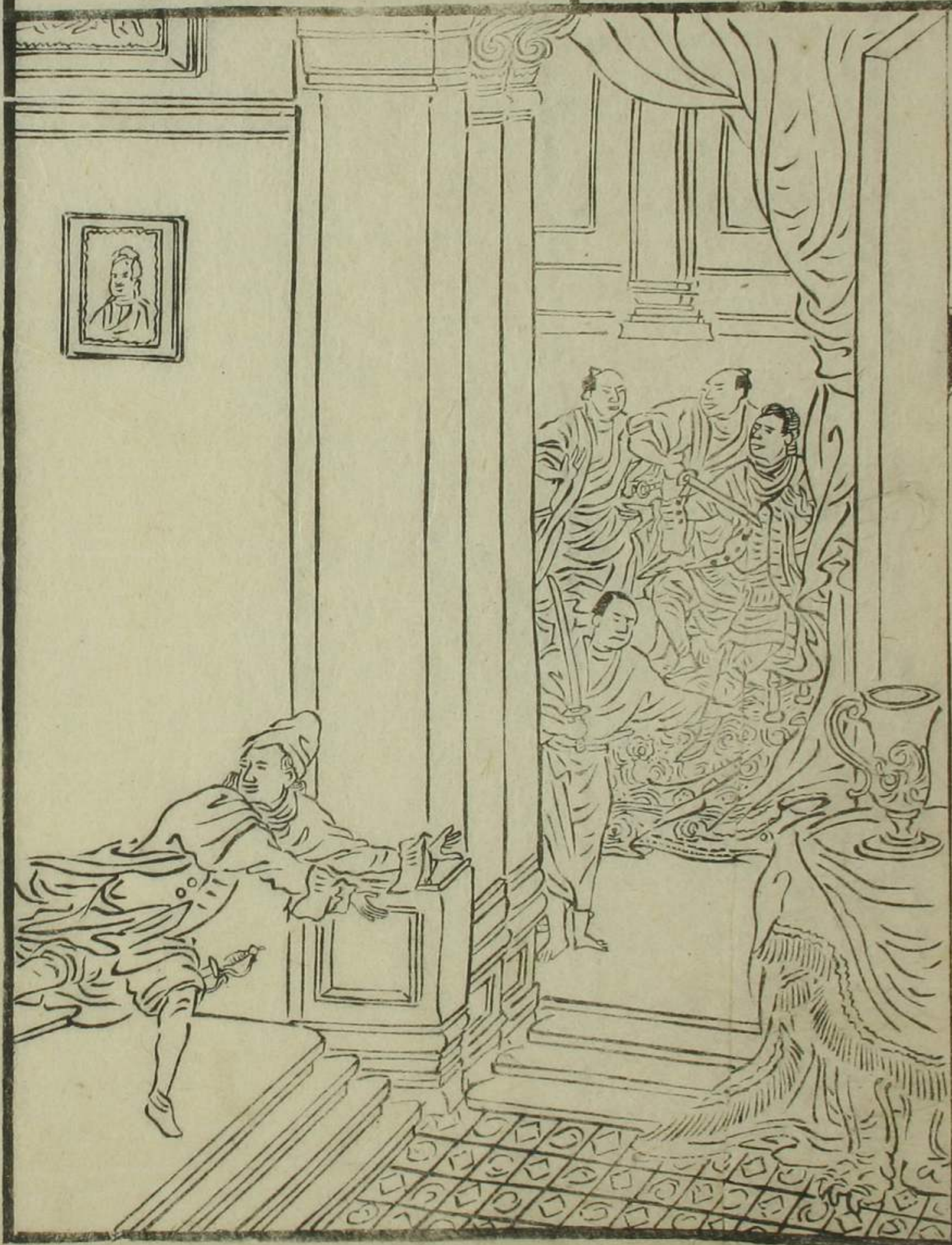
よ。出。し。へ。り。高。船。た。れ。ハ。も。ろ。く。一。き。兵。盞。も。た。り

所。論。手。紙。動。う。さ。を。事。の。破。紙。引。出。ん。と。千。算。万。計

て漸く虎口を逃れ。磨経いふくちをくして  
 送る。長崎へ返却し。爾々の由氏流道々進ば。  
 卒花念然として怒。怒を冲。ありき。夷どもが  
 振也。ふ。罷々。以。来。日。本。の。取。扱。も。さ。て。ぶ。ら。り。と。  
 目。小。抽。足。せ。て。く。ま。ん。ど。と。昂。刻。管。内。の。町。人。濱。田  
 汰。米。あ。る。者。を。ぞ。招。き。け。る。扱。此。濱。田。汰。米。あ。る。者。  
 を。新。花。と。い。ひ。く。女。人。も。性。質。剛。強。し。て。頗。  
 智。畧。あり。使。を。り。く。世。小。唱。卒。生。人。は。負。こ。り。紙  
 以。く。悔。快。と。も。末。以。氏。時。常。は。伯。叔。を。電。し。て  
 厚。く。恩。を。加。ゆ。れ。ハ。彼。等。も。衆。人。の。め。く。伏。従。り。り

お。さ。て。お。世。使。を。弛。り。り。たり。福。あ。く。兄。弟。の。者。来  
 已。け。進。ば。卒。花。悦。く。出。迎。ひ。彼。夷。在。が。法。の。以。才  
 を。活。り。私。の。意。執。ハ。扱。並。ぬ。海。内。の。強。國。と。云。を  
 元。一。日。本。の。和。と。な。れ。ハ。其。分。小。さ。一。並。が。じ。  
 此。報。小。泡。吹。や。ん。ど。り。者。你。等。を。至。く。外。小。に。一。  
 色。も。角。も。能。ふ。も。う。い。ひ。け。さ。せ。と。任。憑。て。央。れ。  
 ハ。女。人。い。と。易。く。う。け。ぐ。ひ。汰。米。あ。る。者。伴。汰。米。あ。る。者。  
 末。次。より。の。附。人。を。加。へ。く。十。八。人。い。づ。れ。も。高。人。の  
 種。は。赤。粉。私。小。ハ。貨。物。を。積。入。不。日。小。支。度。と  
 の。ひ。り。れ。ハ。纜。を。解。や。い。か。帆。を。引。揚。て。地。方。を

瀧田兄弟大害



らへど云ヒまきししく曲カ録ルの前ヘ儼ヒをカ前カにカ氣  
 能キぶブを見ミ切キく電ヒの閃ヒめく。能キをつツく「ぜ子シララを  
 えて押シ付ケ。能キ着シをシ拔キきもモ早く。袖カ先シ指シ附ケ。  
 先シとト假カ不フ新シ花ハ汰タ花ハ門カ。拔キ連レく突ツ立ツく。是レは  
 兄ニ侍シ側カの重シ人ニ取リをシ抱クへシ返スるもあり。刃ヲを  
 拔キくもあり。其レ中ニ鼎ノの瀾ガめく。上ヲをト下ヘと  
 かへシけり。おハ小カおハ味カ方ノ者ハは揚キ着キをシ受ケ  
 たりもあり。日本ノ刀ヲをシ拔キうぞ。喚キて内ヘ孔ヲ入レ去リ  
 鬧カ噪カ大クなるぞ。其レ時ニはシ大ク音ヲをシ上ヘやめれ  
 夷ノどもも爾ニ等シみぞ。ふハ手ヲ紙ヲ動カすハバハ忽シ「ぜ子シララをシ

を一突ふまづ。静まらざる些細をばと叫ぶ。怒。  
 あくとも獅子の喉の如く。重人どもは一玄は碎易  
 一。左右なくも寄付む。右手は、刃の柄を志  
 しく。左手は一把握の汗を握り。斤唾を飲む。伺ひ  
 ける。泳ぎ弟兄弟。世子ラ匹を引起。彼一條を  
 盤問ぐれば。世子ラ匹慄々。言ひあやう。いふも其  
 法をそとて。し。我死下の重人あり。方今互  
 市のおも他國へ。恥を泣く。地を立ざれば。ゆり  
 来り。見候侍。重に刑に引ひ。罪を贖ひ。ま  
 べ。ままその賢ふ。我一子をまらべ。と。十二歳

小あうける男子を出。自今以後。妻國の恥。お指  
 さ。し。も。し。ま。は。じ。し。海。山。お。松。を。立。り。る。を。  
 兄弟今。ま。ま。く。世子ラ匹を。あ。し。人。質。を。引。立。て  
 宗。取。一。千里の波路を。一。走。お。も。海。へ。帰。帆。  
 一。末。次。氏。へ。面。謁。一。人。質。の。子。氏。は。一。り。其。年  
 の。内。大。寛。の。世子ラ匹。彼。海。城。を。し。し。一。恥。の  
 重。人。ども。は。重。く。刑。に。引。ひ。末。次。氏。は。一。源。く  
 罪。を。謝。一。り。ら。ぬ。り。と。り。世子ラ匹。不。送。恨  
 も。あ。ま。さ。り。の。ま。ま。を。さ。む。で。あ。八。連。聖。年。人。質。を  
 返。一。り。る。彼。濱。田。が。智。勇。の。程。始。皇。を。刺。損

高田新言 卷之四  
なると荆軻ぶぐハ日をおかしくしてきて海を  
くぐりて流るる世代早くして。茅新苑ハ肥の  
みちの後の玉。何れかの后となりしりらとあ  
此箇ハコレコレイに小裁するを北山氏の摸写  
とらたり。文字紙同きるを異國の果ヲ  
と。畫小写し一葉小記しと云云のこも。淡田  
兄弟ハかへもくも日ハ魂のまを乃天ノ元地ハ  
徹りたる者あり。

附録

○巨銅人 羅得崑

亞細亞洲中地中海の内ハ「ロッデス」樂得崑といふ  
一の小島あり。「ナトリーヤ」那多理亞ハ屬也。諸國の  
高船湊集して最豊饒の地あり。其島の港口  
ハ銅を以て鑄成する。一軀の巨像を建たり。  
中良業小見世界七奇の一あり又  
名を「コロシユ区」といふ。コッデスベールといふ  
兩足ハ海中より石をりりて築する。二の臺を  
踏くまゝなり。其跨下を潤りて巨艘行  
して遍停せざる不玉。手の指尋常乃人

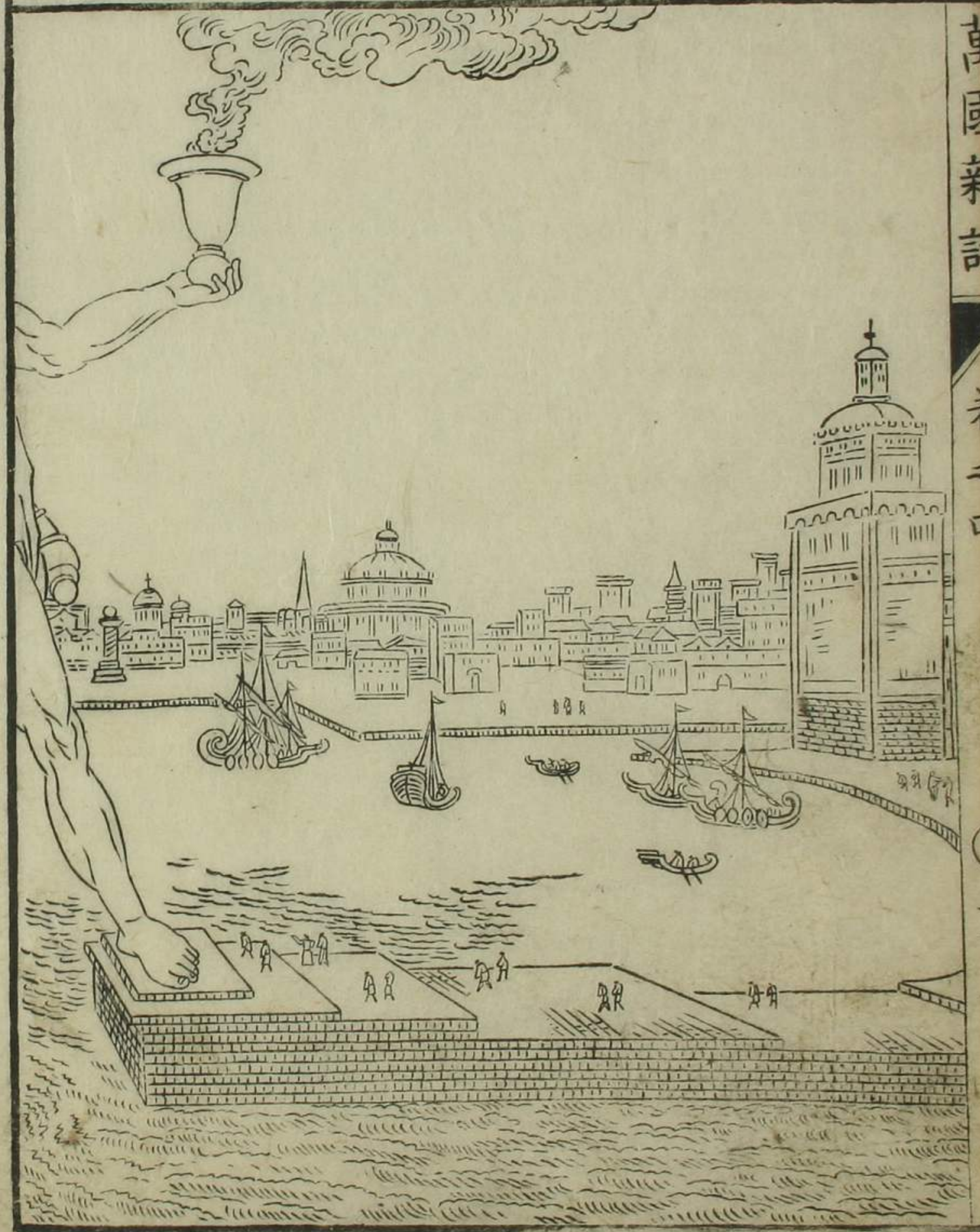
高田新言 卷之四 二十五



港口銅人圖



地中海樂德寫



萬國新言 卷之四

両手をとりて合抱するありき。全社の背は  
 あれが以て准（おし）知（し）ぬ。幸方より平時ハ精  
 巧無比。まこと不海内の奇観なり。往昔國君  
 鑄工（いり）ロイシッピジッシビユル此ある者および其才子  
 「カレスレイシデユ」をなす者其人小令して  
 造成せしむ。其像が建つ時大石數多體內小  
 納（な）く鎮（ちん）し。永久小安置せん支を計り  
 夫より星霜六十五年が経く後地震の  
 力摧倒せしれ。基址とも小海に沉没を碎て  
 涯（き）よありの阜陵（ふらう）の如し。國王縣令「サラセ

一子にあり者小令し駱駝九百隻を以。彼破壊  
 せり巨像を寺觀（おやみ）に運送せしめ各所は是を  
 修葺せしめたりと。明の末西洋より佛化の  
 人支那ふる。昨彼海に渡りて親く銅人を  
 見たりとあり。尤も小燭（ろう）を持し。我は其公  
 海神（かみ）の照（てる）し。瞭然として港涯（みなと）を認る不便  
 ありしむ。其火を照らすとある時ハ是の肉小  
 旋（ま）まる様あり。層（かさ）が睡（ね）る様（よう）をハ體内（たい）を  
 分けて掌上（てのひら）に出。燈（あかり）よ火（ひ）を施（ほ）すとあり。此銅  
 人の發（は）せしより日（ひ）く小人（こじん）夫（そ）千餘人（せんじゆじん）ありと十

二年不<sup>レ</sup>して落成<sup>セ</sup>と<sup>レ</sup>いふ。此圖此統と<sup>レ</sup>不  
水山汎泥<sup>ハ</sup>龜子<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>り是紅毛画<sup>ヲ</sup>を寫  
せる物<sup>ナリ</sup>。



萬國新話卷之四終

### 木村寫先生著述書目

西洋奇譚 さいやう きき だん

近刻 全五冊

先<sup>ニ</sup>行<sup>レ</sup>れ<sup>ル</sup>紅毛雜話<sup>ノ</sup>後篇<sup>ヲ</sup>  
して初編<sup>ニ</sup>入り<sup>レ</sup>る事<sup>ヲ</sup>を記<sup>ス</sup>  
波邦<sup>ニ</sup>にて用<sup>ハ</sup>ち<sup>ル</sup>武器<sup>ト</sup>馬具<sup>ト</sup>乃<sup>チ</sup>苗  
式<sup>ヲ</sup>を附録<sup>ス</sup>

万象雜組 まんざう さうそ

同上 全十冊

天文地理<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ど<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>内小  
あ<sup>リ</sup>る事<sup>實</sup>を載<sup>シ</sup>英小本<sup>ヲ</sup>  
の板事<sup>古言</sup>不<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>り追部<sup>ヲ</sup>を分  
ち<sup>ク</sup>見<sup>ル</sup>安<sup>ク</sup>記<sup>ス</sup>

萬國新話 ばんこく しんわ

次編 追刻

歐羅巴洲<sup>之部</sup> 全五冊  
亞弗利加<sup>之部</sup> 同上  
亞墨利加<sup>之部</sup> 同上

大日本地名便覧

既刻

両面摺

都城陣營神社仏閣新古の名所  
英其地の名物等部を分けて見出  
く記を連奇俳諧の序を遊旅行  
の人懐小るべき書也

農工力車

近刻

全五冊

紅毛の工夫を以て製し起柱  
起重水車風車本匠泥匠具を  
く日時計斗ふ時計斗宿を以  
車宿与る磨等の置式あり

寛政政元十一月発行

日本橋北室町二丁目

東都書肆

須原屋市兵衛梓

明治廿六年六月紫原氏ヨリ求也

を

五冊之內

尚古堂

楊本氏